

ダマスコスのペトロスの修行階梯論

——「ヌース」の祈り——

東方キリスト教修道文学の詞華集『フィロカリア』⁽¹⁾に、ダマスコスのペトロスの作品が収録されている。『フィロカリア』の編者の一人ニコデモスによれば、ペトロスは七七五年頃にダマスコスの主教を務め、アラビアで殉教したとされる⁽²⁾。しかし、現存する写本⁽³⁾に示されている著作年代は、主に十一世紀ないし十二世紀であることに加えて、ペトロスが著作のなかで十世紀後半に活躍したとされるシメオン・メタフラステス⁽⁴⁾に言及していることから、ペトロスは、おそらく十一世紀末頃から十二世紀頃の人物と見られている⁽⁵⁾。今日までに為されたペトロスに関する研究の数は、あまり多いとは言えない⁽⁶⁾。しか

し、『フィロカリア』に収録されているペトロスの著作は、他の著者に比して大部であり、実に証聖者マクシモスに次ぐ分量を占める⁽⁷⁾。この事実は、『フィロカリア』の編纂者たちがペトロスを重要視していたことの一つの証左になると言える⁽⁸⁾。また、ペトロスは、新神学者シメオン（九四九頃—一〇二二）とグレゴリオス・パラマス（二二九六頃—一三五九）という東方キリスト教の二大思想家が登場する時代の狭間に現れ、活躍した著作家であると考えられている。この十一世紀末から十二世紀という年代は、学界においてこれまでほとんど顧みられてこなかったと言え⁽⁹⁾。従って、ダマスコスのペトロスの思想に関する研

袴田 渉

究は、東方キリスト教における如上の時代の思想状況に光を当てたものであり、思想上極めて重要である。

1. 著作と歴史背景

今日、ペトロスの著作で残されているものは、『フィロカリア』所収の二つの作品、『神をその背に担う敬虔なるわれわれの師父、聖殉教者ダマスコスのペトロスの書』（以下、『ペトロスの書』と略記）と『靈的な覚知の完成までを見通す二四の総覧的な講話』（以下、『講話』と略記）である。『ペトロスの書』は「講話」の形式と一人称による「告白文」の形式が混じり合った書物である。告白文としては、既に新神学者シメオンの例があるもの¹⁰⁾、講話と告白文が混じり合ったこのような文学ジャンルは東方キリスト教文学において極めて稀である。こうした特異性は、同書が二つの異なる目的をもっていることによるとと思われる。すなわち、個人的な「覚え書」としての側面と、公的な「講話」の側面である。ペトロスの序文によれば、彼は自分のこれまでに読んだ教父たちの書物や聖書の詩句を覚えておき、それでもって自らの魂を「詮議するため」に自

著を書き記したとしている¹¹⁾。しかし、同書は必ずしも一人称単数（わたし）の語りに終始するのではなく、むしろ多くの場合一人称複数（われわれ）の語りによって展開する。そのため、同書は、個人的な教訓のためだけでなく彼を取り巻く他の修道士に向けた講話の体裁をとるに至っている。この事情は、『講話』においても同様に当てはまる。同書は表題にある通り、全二四講話から成る。各講話は、冒頭に α （アルファ）から Ω （オメガ）までの字母を頭文字にした語が順次配置される。このような文学形式は、ビザンツ帝国において一般に知られたものであり、とりわけ教導的な意図のもとに書かれたものが多く、東方キリスト教修道文学のなかにも見出される¹²⁾。

彼の著作の大きな特徴を為す要素の一つに、引用される聖書と教父文献の豊富さを挙げることができる。これは、先に指摘しておいたように、彼の著作が「覚え書」の性格を持っていることと関わっている。以下に、著作の中で彼自身の挙げている文献のリストを含む箇所を引用する。

全く自分の本を持っておらず、またかつて所有したことがないので、わたしの身体にとって必要な物である

かのように、キリストを愛する兄弟たちから本を借りていた。神への愛ゆえに、それらの本をじっくり詳細に吟味して、それらの所有者に返却したのであった。

それらの本は以下の通りである。旧約聖書と新約聖書すなわち、旧約の律法書、詩編、四王記¹³、知恵の六書¹⁴、預言書、歴代誌、使徒言行録、福音書、そしてこれらすべての注釈書である。さらに以下の偉大なる師父の書と教への書である。すなわち、ディオニシオス・アレオパギテス、アタナシオス、バシレイオス、テオロゴス、クリュソストモス、ニュツサのグレゴリオス、アントニオス、アルセニオス、マカリオス、ネイロス、エフライム、イサク、マルコス、ダマスコスのヨハネス、クリマコス、マクシモス、ドロテオス、フィレモнос、そしてあらゆる聖人の伝記と言葉である。¹⁵

上掲の文献群の引用ないし参照からなるペトロスの著作は、自ずとキリスト教文学のアンソロジーの性格を帯びることとなった。そのため、ニコデモスはペトロスの著作を、同じくキリスト教文学のアンソロジーとしての『フィロカ

リア』と比較して、次のように述べている。

それゆえ、このペトロスの書が『フィロカリア』全巻と同種のもので、われわれが追い求めている目的に極めて貢献することを知っているので、『フィロカリア』にどうしても収める必要があると判断したのであった。それを機知に富んで言うならば、あたかも輪に輪を合わせるように、より大きなフィロカリアに大きなフィロカリアを合わせるように、より広いものに要約されたものを合わせるようなことであった。¹⁶

つまり、ペトロスの著作は、フィロカリアのなかのフィロカリアであり、いわばフィロカリアの精神を体現するものとしてニコデモスによつて位置づけられていると言える。

既述のように、ニコデモスによつてダマスコスのペトロスのものとされている著作は、文献学上同定することができず、今日までその真の著者について決定的な見解は提出されていない¹⁷。そのため、ペトロスの歴史的状况について述べることは難しい。ここでは、ペトロスの思想を理

解するために資する限りで、若干の歴史的状況について言及するに止める。

ペトロスが自らの著作の中で記しているところによれば、彼は修道士である¹⁸。また、その記述内容と同定されている著作年代から、彼はビザンツ帝国領下の修道院ないし僧庵に暮らしていたと考えられる¹⁹。当時のビザンツ帝国下にあつた修道院は、八世紀に展開された「イコノクラスム（聖像破壊運動）」によつて弾圧され迫害された時代を経て復興・発展の時代を迎えていた。十世紀、今日でも東方正教会の聖地であるアトス山に最初の修道院たる大ラヴラ修道院が創建されると、十一世紀には、修道院建設の時代を迎える²⁰。また、同時期にコンスタンティノポリスの聖ママス修道院に新神学者シメオンが現れ、彼の著作は修道思想上の画期をなした。教会史においては、この時代に東西教会が分裂し、東方キリスト教世界は大きな節目の時期を迎えていた。

ペトロスはその修行論において、ヨアンネス・クリマコスを参照しつつ、「静寂（ヘーシユキア）」を重視し、「神よ、罪人であるわたしを憐れみたまえ」という徴税人の

祈り（ルカー八・二三）を繰り返し引用する。ペトロスの修行におけるこれらの要素は、後のグレゴリオス・パラマスによつて体系化された「ヘシユカスム」の伝統に連なるものであると言える²¹。そのペトロスの修行論において人間救済の要となるのは、ヘシユカスムと同様に、「ヌース」である。ヌースは、ギリシア哲学や、教父の文献のなかで極めて頻繁に現れる重要な語であるが、最も翻訳に困る言葉の一つでもある。それは、ヌースの多義性によるところが大きい。広義には、動詞の *νοέω* つまり「見る」という言葉から発して、「ものを知る」能力一般を意味し、とりわけ、抽象や概念把握、推理判断などの、感覚とは区別された認識能力を指すが、狭義には、「世界の動力因」（アナクサゴラス）²²を意味し、また世界を構成する「（第二）原理」（新プラトン主義）を表す²³。

それに対して、東方キリスト教、とりわけヘシユカスムの伝統において、ヌースの意味は上記のギリシア哲学における用例を踏襲しつつも、それとははっきり異なるものが提示されている²⁴。その最たる例の一つが、ダマスコスのペトロスによるヌースの用法である。ペトロスは、その修行論の中でヌースを論じており、そこにおいてヌースは

修行の行為対象としてのみならず、行為主体としても扱われている。それは、従来の魂論や広義の神論にはあまり見られなかった、(神との)関係性の中で展開されるヌースの用法であり、そこには神との合一の問題をも含まれている。

本論では、そのようなパトロスがその一種の修行階梯論の中で、ヌースをどのように言い表してきたのかを検討していきたい。なお、パトロスのヌースに関する叙述の非論理性、非体系性は、それが修道士の実践的・経験的場面における言説であることに因ると思われる。

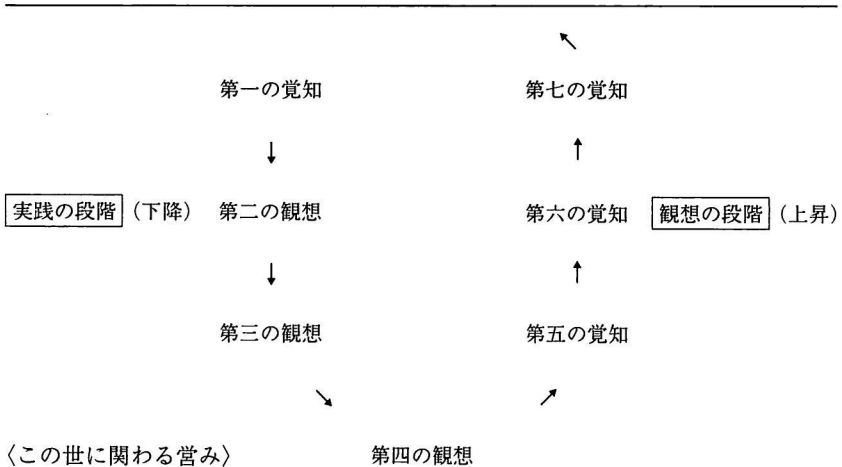
2. 「八つの観想」の構造

パトロスにおいて、ヌースは彼の修行論の中で問題にされる。パトロスの論ずる修行の形式は、ヨアンネス・クリマコスからの影響が見られ、修行の道程は一種の「階梯」として表現される。彼の修行階梯論には、主として「七つの身体的実践」²⁵⁾と「八つの観想」がある。パトロスにおいて、両者は密接に関わっており、前者は後者の修行

を行う前提となる。ここでは、彼の修行階梯論の中から、「八つの観想」と呼ばれるものに焦点をあてて、ヌースの問題となる枠組みを明らかにする。この階梯を辿って行くことで、修道者は神との合一が期待されるわけだが、その構造は、以下のようになっている。ちなみに、彼の語彙において、「覚知」(γνώσις)と「観想」(θεωσία)は交換可能な言葉になって注していることに注意が必要である。両語は、修道者によって能動的に行われるものではなくて、受動的に与えられるものであるという点で共通している。後に指摘するように、八つの観想の過程において、一貫してこの受動性が必要とされることになる。

図表〔次頁参照〕

ここに見られるような、三つの区分原理が組み合わされて、(イ)実践の段階と観想の段階の覚知、(ロ)この世に関わるものと来たるべき世の営みとしての覚知、(ハ)下降としての覚知と上昇としての覚知の区分が観想ないし覚知に導入される。これらの区分は、それぞれ前者よりも後者の方に優越が置かれるために、これら八つの観想の中



(八つの観想における区分原理：実践／観想、この世／来たるべき世、下降／上昇)

に、一種の階梯が形成されている。

では、各段階の観想ないし覚知の内容はどのようなものだろうか。以下に、簡潔にその内容を列挙する。

- ① 第一の覚知…この世の生の抑圧と誘惑についての覚知
- ② 第二の観想…人間の過ちと神の恩についての覚知
- ③ 第三の観想…死の前と後の恐怖についての覚知
- ④ 第四の観想…イエス・キリスト、聖人、師父たちの言行についての理解
- ⑤ 第五の覚知…事物の本性と変化についての覚知
- ⑥ 第六の覚知…感覚的な被造物についての覚知
- ⑦ 第七の覚知…知性において捉えられる被造物についての覚知
- ⑧ 第八の覚知…神についての覚知

以上の八つの観想ないし覚知は、すべてヌースに関わるものであるとされる。従って、これらの観想は、ヌースにおいて生起する一連の出来事として捉えられていると言える。

八つの観想を考察する際にまず指摘しておくべきは、その時間性・段階性である。つまり、八つの観想は、第一の

覚知を経て初めて第二の観想に至ることができるのであり、途中の段階を飛ばして第八の覚知に至りえないという秩序を内包している。このことは、ヌースもまた時間的性格をもつものであり、それゆえ可変的なものであることを示している。八つの観想における時間性は、先に示された「この世に関わる営み」と「来たるべき世の営み」の区分にも表れている。「来たるべき世」とは、キリスト教信仰における、歴史の終末に際してのキリストの再来に伴って、身体が復活した後の世界を指している。従って、「この世に関わる営み」が現在のであるとすれば、「来たるべき世の営み」はすぐれて将来的である。それでは、来たるべき世の営みである「第八の覚知」とは、修道者の死後に到達されるものであるかと言えば、必ずしもそうではない。ペトロスの考える「来たるべき世の営み」とは、「この世」においても起こりうるものである。なぜなら、ペトロスは、終末論的な神支配の場である「天の国」について説明する際に、『ルカ書』十七章二節（見よ、天の国はあなたがたのただ中にある）を引用して、「天の国」が現在のわれわれのうちに「あらかじめ置かれている」ことを強調しているからである²⁶。そのため、八つの観想は、単なる直線的

な過程ではなく、八つの段階を経ることで、「現在のわれわれのうちにあらかじめ置かれている」、所与の天の国に関わる営みに至るといふ円環的構造を有している。ただし、第一の覚知における「現在」についての観想と、第八の覚知における「現在」についての観想は同じものではなく、質的に異なっている。そのため、八つの観想は、円環的な構造をもちながらも、決して回帰的なものではなく、むしろある方向性・傾向性をもっていわば螺旋を描いているのである。そして、そのような方向性・傾向性を有する八つの観想は、ある空間性を孕んでいると言える。そこで、次に八つの観想における空間性について考察する。

八つの観想は、時間性をもつと同時に、ある空間性をもっている。それは、先に指摘した下降と上昇としての観想の区分に相当する。すなわち、八つの観想をヌースの運動として捉えるならば、第一から第三の観想を下降運動として、第四から第八の観想を上昇運動と見ることができ

る。具体的に見ていくならば、第一の覚知において、修道者は、天上にあるエデンの園からのアダムの墮落を観想することから始め、次いで第二の観想において、地上で罪に苦

しんでいる自分自身を省み、第三の観想では、自らの死と地獄の情景を観ずる。従って、これら第一から第三の観想を通して、修道者のヌースは天上↓地上↓地獄（地下）という下降の道を辿ることになる。

そして、第四の観想に至ると、ヌースはキリストの地獄への下降（κατάβασις）を観て仰天（εὐχέλαια）し、かつ聖人たちの言行を想起して驚く。次いで第五の覚知において、ヌースは地上に戻ると、一旦事物の本性を空しいものと観じ²⁷、その後、第六の覚知においては、同じ地上的・感覚的事物に美しさと意義とを見て仰天する。そして、第七の覚知に至ると、ヌースは天上において天使（知性において捉えられる被造物）の秩序を観想する。最後に、第八の覚知において、ヌースは「純粋な祈りを通して導き上げられ」て、超越的な神についての観想へと至る。以上をまとめると、第四から第八の覚知を通して、ヌースは地獄↓地上（空性）↓地上（美）↓天上↓神（超越）という上昇の道程を辿るのである。

以上のように、八つの観想は、ヌースの下降上昇運動という力動的な契機を含んでいる。ただし、この運動は、決して単純な連続ではなくて、むしろ断続的であり、一つの

段階から他の段階に至るには、必ずやある種の飛躍を経なければならぬ。というのも、八つの観想における各段階への移行は、修道者の意思によって行われるのではなく、次の段階の観想・覚知が自ずからヌースに「訪れる」という仕方であるからである²⁸。この連続性と飛躍性の緊張関係こそが、ペトロスの修行階梯論の基礎をなしている。

そして、このような断続的運動の動因となるのは、ペトロスによれば神からの愛（人間愛）²⁹であり、それに対する修道者の側の応答が八つの観想におけるヌースの運動の方向性を決定づけている。その応答とは、「恐れ」や「後悔」、「不安」、そして「改悛」や「仰天」、「情愛」などであり、すぐれて心理的・感情的な事柄である。ここで興味深いのは、ペトロスの八つの観想についての記述において、このような心理的応答の主体が、修道者（わたし）と修道者のヌースとの間でしばしば入れ替わるという事態である。このことについては、次節で論じる。

3. ヌースの諸相

以上の八つの観想の枠組みにおいて、ペトロスは「ヌース」という言葉をどのように表現しているのだろうか。彼は、言葉に厳密な定義を加えて論理的に語るような著述家ではないが、それでも一つの言葉を複数の意味で用いるとすれば、そこには偶然ではない、ペトロス自身のなんらかの必然性があったのではないかと問うことはできる。そこで、ここではヌースという言葉がどのような意味の射程を有するのか、その諸相を取り出してみたい。

(1) 認識能力・作用

ペトロスにおけるヌースという語の最も基本的な用法は、「認識能力」ないし「認識作用」であり、そのことはヌースが「(魂の)目」という言葉で言い換えられている点に、端的に表れている⁽³⁰⁾。さらにペトロスは、プラトンによる魂の三分説に従って、魂を理性(知性)的部分、気概的部分、欲求的部分に分けて、後二者を支配するところの理性的部分をヌースに当てはめている⁽³¹⁾。ここから分かるように、ペトロスは、ギリシア哲学以来の身体と知性(精神)の二分法に立ち、かつ人間の五感の中でも視覚を最も優位に置いている。というのも、ペトロスの修行階梯

論では、この「魂の目」としてのヌースにおいてこそ、神との合一の事態が生じると考えられているからである。

この魂の目たるヌースは、はじめ「罪」や「情念」によって暗くされて、見えなくなっている。その目が開かれ、浄化されていく過程が第一から第三の観想において描かれる。そして、この浄化は涙を通して実現される。すなわち、「ヌースは、悲しみなくしては浄化されることができない」⁽³²⁾と言われる。ここで注意すべきなのは、「涙」を流して「悲しみ」、浄化される主体が、修道者ではなくヌースだという点である。このことは、霊的・知性的能力としてのヌースが、ペトロスによって、身体的感覚に類比されるある種の感覚を持つと考えられていることを示している。この感覚は、ヌースに「悲しみ」等の感情を惹起し、「涙を流す」という身体的動作を起こさせる。もちろん、ヌースは身体とは区別されており、かつ魂における気概的・欲求的部分とも区別されているため、このような表現は一種の比喩であると言える。ただし、ここでの比喩は、譬えによって物事を分かりやすく説明するという比喩本来の目的のために用いられているのではなく、ペトロスに体験

されたままのヌースを描写した際に、そのような表現になつたと思われる。それは、この著作がペトロロス自身の「覚え書」であること、さらに彼の扱う事柄が神との合一という、いわゆる「神秘」に関わるものであるゆえに、多くの神秘家たちの著作と同様、必ずしも学問的・論理的な形式に従っていないことによると思われる。ペトロロスにおいて、このような論理を離れた叙述は、単なる錯誤ではなく、むしろ決定的に重要な情報を含んでいる。つまり、ヌースにおける「感情」や「身体的動作」こそが、ヌースを変容させ、八つの観想における段階的な移行を可能にするのである。しかし、次節で明らかにされるように、ヌースにおける感情はまた、自らの霊的歩みの妨げにもなるのである。

また、修行階梯において、修行の主体は、しばしば修道者とヌースの間で入れ替わる。ここにおいてペトロロスの論述は、一見錯綜しているように見える。しかし、ペトロロスにおいてヌースは、たとえそれが人間を人間たらしめるものである魂の一部分を占めるのだとしても、修道者とそのヌースの単純な同一視はなされていない。むしろ、ヌースは、以下に見ていくように、修道者にとって、見張り、注意を払うべき対象として、さらには自らの把握を超ええるも

のとして現れて来るのである。

(2) 見張りの対象

第四の観想以降、ヌースは修道者にとってむしろ見張らなければならぬもの、注意すべきものとして問題化される。その理由は、ペトロロスによって次のように説明される。

それはまた、ヌースがその高慢を通して、自らの賢慮によって把握していると思ひなして、正しい目的の上を踏み越えていつてしまわないためであり、さらには、その無知によって、すぐにはその完成に達しえないゆえに、正しい目的の下方に逸脱してしまわないためである。また、ヌースが、事物への背向と憎しみを通して、正しい目的の右側に逸れたり、不合理な愛着や、あるいはまさに情念への傾きを通して左側に逸れたりしないためである。さらにまた、ヌースが、完全な無知やためらいを通して、正しい目的の内側から逸脱したり、軽蔑や邪悪さから生じる余計な手出しと不合理な熱意を通して、その外側に逸れたりしないためである。³³

ヌースは「高慢」、「憎しみ」、「不合理な愛着」といったある種の感情ないし情念をもち、そこから生じる傾向性によって様々な方向に動かされるゆえに、しばしばその「正しい目的」、すなわち神との合一という目的から逸脱してしまう。そのため修道者は、ヌースを見張り、時にそれを「聖句のうちに閉じ込め」、時に「悔悟の奔流のうちに保たねばならない」とされる⁽³¹⁾。つまり、修道者は、聖句にヌース（知性・精神）を集中させ、悔悟し続けることによってヌースを他の感情に引きずられないよう保つようになければならない。一般に、ヌースは魂の一部分として、修道者（わたし）の「内部」、すなわち「わたし」という意識の支配圏域に存するか、或いは「わたし」の意識そのものだと想定されうる。しかし、ペトロスにおいては、ヌースは「わたし」の支配圏域に存しないという意味で「わたし」の「外部」に在り、自意識に同定できない。

その時、ヌースはもはや単なる認識能力には還元されえず、むしろ修道者（わたし）にとって自らの意識とは別の、感情を具えた一個の存在として立ち現れている。たしかに、ヌースは人間の記憶を司るものでありながら、ペト

ロスにおいて、それが「わたし」という自己意識の基点として捉えられているわけではない。従って、ヌースは、いわば「わたし」の内なる他者であると言える。

そして、そのような自意識と区別された一個の存在たるヌースは、修行における主体（わたし）の客体（見張りの対象）であるにとどまらず、しばしばまさに修行の主体として表現される。さらに、次に見るように、ヌースこそが人間における神の似像とされ、いわば人間の本体・本質としてのヌースの性質が明らかにされる。

(3) 神の似像

「ヌースは不可視の神の無限なる似像である」⁽³⁵⁾とは、八つの観想のうち第六の覚知において明らかにされるヌース理解である。人間が神の似像であるとは、『創世記』にみられるキリスト教の重要な教説であるが、この神の似像をヌースに特定する例は、管見の限り、他に類を見ない。ペトロスは、第三の観想において「わたしは自分の全体が地に属する者であるのに、ただヌースのみによって、あなた（神）の傍らに立つに値する者とされた」⁽³⁶⁾と告白している。

では、なにゆえに、ヌースが神の似像に特定されるのだろうか。そのことについて、ペトロスはカイサリアのバシレイオスに依拠しつつ、神が世界を予見（撰理）するよう
に、ヌースもまた「ものの」形姿の尽き果てる処にまで
他に先んじて至る」³⁷、すなわちこの世界の事象を予め見
通すのだとして、両者の「能力」におけるある種の同質性
を根拠に説明する。さらに、ペトロスは、このようなヌー
スの能力を説明して、「なぜなら、ヌースは、自らをすべ
ての事物の形姿に変えるからであり、自らが採り上げた事
物の形相に染まるからである」³⁸としている。このように、
ヌースの認識活動を、ある種の「自己変容」として捉える
のは、ペトロスのヌース理解の大きな特徴と言わねばなら
ない。彼のヌース論において、この可変性・可染性こそは、
ヌースをヌースたらしめる性質であり、この性質ゆえにヌ
ースは、一方で感情・情念の影響を受ける可能性にさらさ
れ、他方で神との合一に開かれていると言える。なぜなら、
ペトロスによれば、「ヌースは、形なく姿なき神のうちに
生じるに値するものとされるときには、形なく姿なきもの
となる」³⁹からである。

(4) ヌースの祈り

では、ヌースが「形なく姿なきものとなる」とは、どの
ような事態を表しているのだろうか。ペトロスは、八つの
観想における最終段階、第八の覚知についての説明におい
て、神との合一の場面を次のように描く。

ヌースは、まさに祈りへの衝動そのものにおいて、神
的な切望によって奪い去られると、マクシモスとダマ
スコスのヨアンネスが言うように、もはや、すべての
点において、この世から何かを知解することはない。
その際、ヌースはすべてのものを忘却するだけでなく、
自分自身をも忘却してしまう。⁴⁰

以上の説明によれば、ヌースが形なく姿なきものとなる
とは、「すべての点において、この世から何かを知解する
ことはない」ということ、つまり「この世の事柄」に関し
て何も認識しないということである。そしてそれは、ヌー
スが自分自身を含めた「すべてのもの」を忘却するという
ことでもある。しかし、認識活動や記憶を本性とするヌー
スにとって、認識の停止や忘却とは、まさに自己否定に他

ならない。つまり、それは、本来的に活動的・能動的なヌースが、その能動性を放棄するということを意味するのである。従って、ヌースが形なく姿なきものとなるには、能動性の否定としての受動性が要請されることになる⁴¹。

だが、能動的なヌースにとつて、そのような受動性はいかにして生じうるのだろうか。ここに至つて、ヌースはある新たな側面、すなわち「祈りへの衝動 (odyn)」と「神的な切望 (thobos)」とを示すのである。そして、この「衝動」と「切望」とは、抑えがたいほどの、極度の能動性に他ならない。ここで言う「神的な切望」とは、「神に向けられた切望」を意味し、また「祈りへの衝動」とは、次に見ていくように、「神に対する祈りへの衝動」を表している。より具体的には、この祈りは「純粋な祈り」と呼ばれ、その最も詳しい説明がパトロスの「七つの身体的実践」の説明において為されている。この「純粋な祈り」については、パトロスのヌース理解を知る上で極めて重要であるので、ここで少しく触れておく。パトロスによれば、純粋な祈りとは、「すべての観念を離れた霊的な祈りである」とされ、さらに続けて次のように述べられる。

ヌースは語られることのうちにあるが、それと同時に語ることでできない痛悔のただ中で神にひれ伏し、神的な意志のみが自らのすべての試みと考えるのうちに生じることを求める。その際、ヌースは決して、思量や形や色や光や火や、その他いかなるものも受け容れない。そうではなくて、ヌースは、あたかも神の傍に居るかのよう、ただ神のみに見られ神のみと対話するために、形なく、色なく、装いなきものとなる。⁴²

「ヌースは語られることのうちにある」とは、おそらくこの純粋な祈りが何らかの文言を伴うものであり、その祈りの文言（語られること）のうちにヌースを集中させている状態を指すと思われる。純粋な祈りは、既述のように「七つの身体的実践」において論じられていることからわかるように、ある種の身体的動作を伴うものであり、ここでは修道者による「祈りの文言の詠唱」の動作が伴われる⁴³。その時、ヌースは「語ることでできない痛悔のただ中で神にひれ伏し、神的な意志のみが自らのすべての試みと考えるのうちに生じることを求める」。このような、神に向けられた激しく情熱的な祈りが「純粋な祈り」であり、

先の「祈りへの衝動」とは、まさにこの祈りを指していたのである。

この極度の能動性としての「祈りへの衝動」と「神的な切望」は、しかし逆説的に、受動態においてヌースに働きかけることになる。すなわち、ヌースは「祈りへの衝動そのものにおいて、神的な切望によって奪い去られる（ἀρτάρται）」という事態に至る。ここにおいて、ヌースの極度の能動性は、受動性と相即している。かくして、能動的なヌースが、自己否定であるところの「形なく姿なきものとなる」ことを可能にするのは、この能動性と受動性の相即によるのである。

以上に明らかにされた、ヌースが「形なく姿なきものとなる」という事態は、神との関係において考えられた場合、さらに別の様相を露わにする。すなわち、ヌースの自己否定と神に対する肯定の相即という側面である。なぜなら、先の「純粋な祈り」に関する引用箇所で、ヌースの自己否定としての「形なく姿なきものとなる」事態が、「神的な意志のみが自らのすべての試みと考えのうちに生じること」という「神への肯定」として言い表されているからである。このように、神を肯定したヌースは、「あたかも神

の傍に在るかのようには、ただ神のみに見られ神のみと対話するために、形なく、色なく、装いなきものとなる」。「神の傍」で、「ただ神のみに見られ」という親密さにおいて、「神のみと対話する」ことを求めるヌースは、神との人格的な関係ペルソナに入らんとしていることを表している¹⁴⁾。

4. 諸相の相互関係

ここでは、前節で見たヌースの諸相の相互関係について、改めて考察したい。ペトロスにおいて、ヌースはなぜ多様な意味を持つているのか。まず、前節で概観したヌースの諸相を簡潔に整理する。

(1) 魂の認識能力および認識作用の意味。それは、「ヌース」という言葉の最も基本的な用法である。

(2) 感情を具えた、見張られるべきものとしての意味。ヌースはある種の感情をもち、その感情から生じる傾向性によって神との合一という目的をしばしば逸脱してしまう。そのため、修道者はヌースの動きを見張らなければならぬ。しかし、ヌースは修行の行為対象であるばかりでなく、修道者の自意識と同定しえない一個の存在として、しばし

ば修道者に代わって行為主体となる。その際、ヌースは、修道者の自意識の支配圏域を離れた「内なる他者」と言われうる。

(3) 神の似像としての意味。ヌースは、その能力において神との同質性をもち、その同質性を根拠として、神との合一が可能であると想定される。

(4) 祈るものとしての意味。ヌースは、神に向けられた激しく情熱的な祈り、「純粋な祈り」への衝動と神的な切望によって「形なく姿なきもの」になる。その際、ヌースはこの「祈りへの衝動」と「神的な切望」という「極度の能動性」によって、受動的に奪い去られ、神との合一へと向かう。

以上のように、パトロスにおいて「ヌース」という語は、多義的である。これら四つの意味は、八つの観想の展開の中で、漸次明らかにされたものであった。つまり、それらは八つの観想における段階が進む中で、おおよそ(1)、(2)、(3)、(4)の順序で顕わにされたのである。これらの意味の展開の順序は、ある必然性をもってこのようになっていいると言える。というのも、この四意味は、(1)

を除いて、学問的に整備された、厳密なヌースの定義などではなくて、修道者によって、修行階梯の中でその霊的進歩に応じて体験・経験された意味に他ならないからである。その順序はつまり、最初(1)、単なる(だが高貴な)認識能力として把握されていたヌースが、次いで(2)、修道者の自意識とは同定しえない、感情を具えた、修行を妨げる見張られるべきものとして理解されると、さらに(3)、神との同質性(神の似像)を認められるに及び、最後に(4)、神との合一を切望し、祈るものとしての様相を明らかにされるに至る。

この順序を経ることによって、ヌースの意味の様相は展開・変容していく。その展開・変容の中で、ヌースは、当の修道者の自意識とさえ区別された一個の存在として顕れ、神とのある同質性を示す。そこにおいて、ヌースは神との人格的關係に立ち、合一への可能性が開かれてくるのである。

パトロスの修行階梯論、八つの観想において展開されたヌースの多義性は、修道者の経験したヌースの多彩さであると同時に、ヌース自身が経験した霊的進歩の過程の足跡である。それはまた、ヌースという語に本来含まれている

意味の射程の広さに拠るのみならず、ギリシア哲学やキリスト教思想において用いられ、術語として錬磨されてきた同語の歴史にも依拠して初めて可能となったものである。ペトロスは、このようなヌースという言葉の歴史を踏まえつつ、自らの修道経験に依りながら、ヌースの「人格性」を披き示した。それは、ペトロスの修行階梯論において初めて明らかにされたヌースの意味の位相であった。

注

- (1) 『フィロカリヤ』に引く M. Viller, F. Cavallera et A. Solinac, *Dictionnaire de spiritualité: Spiritualité ascétique et mystique: Doctrine et histoire* (Paris, 1984), 1336-1352. また『*La théologie byzantine et sa tradition* II, ed. C. G. Conticello et V. Conticello (Turnhout, 2002), 999-1021 所収 S. V. Conticello et E. Citterio に引く論文「La Philocalie et ses versions」を参照。本論では Φιλοκαλία τῶν ἱερῶν ὑπὸ τῶν ῥητόρων Γ' (Athens: Astir, 1991) を底本とした。また、翻訳は J. Touraille (trans.), *Philocalie des*

Peres Neptiques, tome 2 (Paris: J.-C. Lattes, 1995); G. H. E. Palmer, P. Sherrard and K. Ware (ed. and trans.), *The Philokalia: The Complete Texts compiled by St. Nicodimos of the Holy Mountain and St. Makarios of Corinth*, Vol. 3 (London: Faber and Faber, 1984); M. B. Arioli e M. F. Lovato (trad.), *La Filocalia: A cura di Nicodimo Aghiorita e Macario di Corinto* (Turin, 1985); 出村和彦、橋村直樹、袴田渉共訳『フィロカリヤ第五巻』新世社、二〇一一を参照した。

(2) Φιλοκαλία, Γ', pp. 3-4.

(3) Paris, Bibliothèque Nationale 所蔵の写本 Ancien gr. 1134 (十四世紀) に引くペトロスの著作は一一五六一—一一五七年に世に出たとされ、Vatican Bibliotheca Apostolica Vaticana, Palat. gr. 210 (十三世紀) に引く一九六—一九七七年とされる。 Cf. J. Gouillard, «Un auteur spirituel byzantin du XIIe siècle, Pierre Damascène,» *Échos d'Orient* 38 (1939), 266. またペトロスの著作の現存する写本の数七百を超え、R. E. Sinkewicz, *Manuscript Listings for the Authors of the Patristic and Byzantine Periods* (Toronto, 1992).

(4) Φιλοκαλία, Γ', p. 28, l. 17. シメオン・メタフラステスは、コンスタンティノポリスの高級官僚であり、月別聖人伝を含むビザンツ典礼暦「メノロギオン」の主要な編

- 纂註せらる。一〇〇〇年頃歿。 Cf. G. Peters, "Recovering a Lost Spiritual Theologian: Peter of Damascus and the *Philokalia*," *St. Vladimir's Theological Quarterly* 49 (2005), 438-439.
- (5) J. Gouillard (*op.cit.*) と G. Peters (*ibid.*) によれば、ダマスコスのパトロスの著作年代は、一一五六年頃である。
- (6) ダマスコスのパトロスに関する主な研究者は、これまでのところわずかに二人、J. Gouillard (*op.cit.*) と G. Peters (*Peter of Damascus Byzantine Monk and Spiritual Theologian*, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 2011) を数えるのみである。
- (7) 『フィロカリア』におけるマクシモスの著作の収録頁数が一六二頁であるのに対して、パトロスは一四〇頁を占める。
- (8) ここでパトロスの後世への影響について補記しておく。パトロスの著作は、『フィロカリア』が出版される以前の十六世紀には、既にロシアで読まれていた。 Cf. D. S. Likhachev, ed., *Knizhnye tsentrny Drevnei Rusi: Iosif-Volokolamskii monastyr' kak tsentr knizhnosti* (Leningrad: Nauka, Leningradskoie otdelenie, 1991), 370. また、パトロスによる「礼拝において指を十字を切る所作をする際の指の数についての説明」(テクスツァ p.110, 132-p.111, 11) は、ロシアの古儀式派によって自説を補強するために用いられた。 Cf. Petrovich Protopope Avvakum, *The Life of Archpriest Avvakum, by Himself*, trans. J. F. Harrison and H. Mirrlees (London, 1924), 121.
- (9) 一二世紀末ないし一三世紀初めに位置づけられる東方キリスト教文学に関する研究には、I. Hausherr, «Le Métérikon de l'abbé Isaïe,» *Orientalia Christiana Periodica* 12 (1946), 286-301 がある。
- (10) Cf. PG 120.
- (11) *Philokalia*, I, p. 5.
- (12) ヨアンネス・クリマコスの『楽園の梯子』第二六講話参照。
- (13) サムエル記上・下、列王記上・下
- (14) ヨブ記、箴言、伝道の書、雅歌、知恵の書、シラの書
- (15) *Philokalia*, I, p. 5 なお、翻訳には『フィロカリア第五巻』(橋村直樹訳)を用いた。上記のリストの他に、カルパトスのヨハネス、エビファニオス、アレクサンドリアのクレメンテ、ヨハネス・カッシアヌス、パラディオス、パウロス・エウエルゲティノス、アレクサンドリアのキュリロス、エウストラテイオス、ヒラリオン、エイレナイオス、クロニオス、シメオン・メタフラステス、およびビザンツ典礼書からの引用が指摘されている。 Cf. G. Peters, "Peter of Damascus and Early Christian Spiritual Theology," *Patristica et Mediaevalia* 26 (2005), 89-109. また、Gouillard (*op.cit.*) によれば、ガバラのセウエロス、シナイのフィロテオス、偽ネイロス(エヴァグリオス)等か

らの影響が認められるとされる。

- (16) *Philokalia*, I, p. 4.
- (17) マヌスロスのベトロスを「ベトロス・マンヌールなる人物と同一視する研究もある。G. E. Steitz, “Die Abendmahlehre der griechischen Kirche in ihrer geschichtlichen Entwicklung,” *Jahrbücher für deutsche Theologie* 13 (1868), 23-31; K. Krumbacher, A. Ehrhard und H. Gelzer, *Geschichte der byzantinischen Literatur von Justinian bis zum Ende des Oströmischen Reiches* (527-1423), 2. Auflage (Munich, 1897), 157; H.-G. Beck, Kirche und Theologische Literatur im Byzantinischen Reich (Munich: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1959), 644; J. Gouillard, *op. cit.*
- (18) *Philokalia*, I, p. 5; p. 38; p. 64; p. 99 参照。
- (19) *Philokalia*, I, p. 64 等参照。
- (20) パトモスのクリストトゥーロスによる聖ヨハネ修道院ガリシオン山のラザロスによる聖ラザロ修道院など。R. Morris, *Monks and Laymen in Byzantium* (Cambridge: 1995) 843-1118 参照。
- (21) くニョカストの歴史に「*イシバ*」 I. Hausherr, «L'hésychasme: Étude de spiritualité,» *Orientalia Christiana Periodica* 32 (1956) 参照。
- (22) アナクサコラス' 断片12。 Cf. H. Diels und W. Kranz, *Die*

Fragmente der Vorsokratiker (Dublin/Zurich, 1966), vol. II,

pp. 37-38.

- (23) プロティノス「エンネアデス」(V.1-9) 参照。
- (24) なお、新約聖書におけるヌースの用例としては、「心」(ロマ7・三三'・二二'・エフェソ四・一七'・四・二三'・二テサロニケ二・二'・黙示録一七・九)'「知性」(一コリント一四・一四'・一四・一九)がある。
- (25) 「七つの身体的実践」は、①静寂、②断食、③徹夜、④詩編の詠唱および身体的祈り、⑤すべて観念を離れた霊的祈り、⑥師父の言説や聖人伝の朗読、⑦すべての言葉と試みの経験への審問、から成る。これらの実践を通じてヌースは浄化されると言われる。*Philokalia*, I, pp. 17-20 参照。
- (26) *Philokalia*, I, p. 47.
- (27) コリントベトロスはとりわけ『コヘレト書』(一章二節)と『詩篇』三八篇(七十人訳)に依拠して、地上の事物の空性について述べている。
- (28) *Philokalia*, I, p. 33.
- (29) *Philokalia*, I, p. 47.
- (30) *Philokalia*, I, p. 25.
- (31) 「*ネブ*」これらの四つの主要な徳は、以下のように魂の三つの力から生じる。一方で、思量、つまりヌースからは賢慮と正義の二つが生じる。他方で、欲求的なものか

場所、「心」等がある。

らは節制が生じ、また気概的なものからは勇氣が生じる」
 (Φλοκαλία, Γ', p. 57)。以下、ペトロスの引用箇所
 の翻訳には拙訳を用いた。

- (32) Φλοκαλία, Γ', p. 46.
- (33) Φλοκαλία, Γ', p. 53.
- (34) Φλοκαλία, Γ', p. 41.
- (35) Φλοκαλία, Γ', p. 53.
- (36) Φλοκαλία, Γ', p. 40.
- (37) Φλοκαλία, Γ', p. 53.
- (38) *Idem.*
- (39) *Idem.*
- (40) Φλοκαλία, Γ', p. 59.
- (41) このような受動性は、八つの観想において、ヌースが一つの段階から他の段階に移行する際に、常に要請されてきたものであった。それゆえ、八つの観想とは、能動性を本性とするヌースにとって、受動性を獲得していく過程であり、自己否定の過程でもあったのである。
- (42) Φλοκαλία, Γ', p. 18.
- (43) このことから分かるように、ペトロスにおいて、「靈的」であることは、必ずしも身体性を排除しない。
- (44) ここで言う「人格的な関係」とは、愛をもち「わたし」と言いうる個的存在同士の間を指す。なお、ペトロスにおけるヌースの用例としては、その他に、「キリストの